

資料紹介

一枚方宿に逗留した南画家－ 田能村直入の「仰山臨水樓囑目」

図1 「仰山臨水樓囑目」

紙本墨彩画 1.11×450



参考図① 「東海酒」看板



「戊寅春直入山樵」と銘があり、明治11年(1878)に揮毫されたもの。

参考図② 「十六羅漢図」部分(図・画賛)



古人曰枯木寒巖三冬無一點暖氣平未識果然然平舌
尊者以神通妙用切力明辯之則當得教三千
界中人悉皆生於極樂淨土若其不得然則非宜
質諸觀世音菩薩 明治四年次重光修合至日寫
於仰山臨水樓為 奥田賢并為寫 寫終有餘白
因併記之改 釋法 七年七世法高直入居士曰釋祥

たのむらちよくにゅう
田能村直入(1814～1907)は、明治時代に京都画壇で活躍した南画家(文人画家)である。豊後
おかはん たけだ
岡藩の城下町・竹田(現大分県竹田市)の三宮家三男として文化11年(1814)に誕生し、わずか
たのむらちくでん
9歳で同郷の画家・田能村竹田の門人になったと伝えられる。幼名は伝太、号は当初、小虎を名
しょうこ
乗ったが、後に郷里の郡名「直入郡」をとって直入と改めた。竹田の没後、26歳となった直入は郷
なおいりのこおり
里を出て、最初に堺、続いて大坂・京に拠点を置いて活躍した。明治13年(1880)には、京都府
画学校(現京都市立芸術大学)を設立し、初代撰理(校長)の要職についた。生涯を南画の振
興に捧げたが、儒学・漢詩・茶道・香道・剣術などを学び、晩年は黄檗山塔頭おうばくさんたっちゅうの住持となるなど
多彩な才能を発揮した人物である。

江戸時代、中国文化を模範とし、中国風の学問や書画を志向する風流人を「文人」と呼んだ。
中国の山水を彷彿とさせる日本各地の名勝をおとずれ、書画詩文に耽ることは、文人が好んだ行
動様式の一つであった。近世文人の流れを汲む直入もまた、旅をこよなく愛し、生涯に渡って各地を
遊歴し、逗留先で数々の作品を残している。そうした直入の足跡が、枚方にも残されている。

明治初年、直入は数度に渡って旧枚方宿を訪れ、奥田家に逗留した。奥田家には、直入筆の
掛軸4本が残され、稼業である酒蔵の銘柄「東海酒」の看板も直入が揮豪している(参考図①
※現在は掛軸・看板とも枚方市教育委員会所蔵)。これらの画賛・銘にある年号は、安政7年
(1862)～明治11年(1878)で、直入の奥田家訪問もおおよそこの時期に複数回なされたと推測で
きる。訪問の契機は不明であるが、天保10年(1839)以来、大坂・京都に拠点を置いていた直入
にとって、京坂間をつなぐ京街道の宿場、淀川舟運の港でもある枚方は、移動の途中に気楽に立
ち寄ることのできる町であった。逗留先の奥田家、屋号「大塚屋」は、造り酒屋を営む資産家である
とともに、枚方宿の宿場役人や村役人を務めた有力家であり、直入を「田能村先生」と呼び敬愛し
た。直入の全国遊歴は、各地の素封家の歓待のうちに支えられていたのである。

図1は、奥田家旧蔵の直入筆掛軸のうち、「仰山臨水楼囀目」ぎょうざんりんすいろうしよくもくである。直入の得意とするところ
の山水画で、掛幅の縦長画面を活かし、風景の奥行きが表現される。俳諧で、目前のものを即興で
読むことを「囀目」しよくもくと言うが、「仰山臨水楼囀目」の併題からずれば、画家が「山を仰ぎ水に臨む楼
閣」に身を寄せ、目に映る風景を即興で描いた、ということになるだろうか。实景をさらりと描いた、写生
に近い、軽い筆致の作品である。

画賛にある通り、直入が枚方宿を訪れたのは6月18日。麦秋を過ぎた梅雨の時期である。先ほ
どまで降っていた雨が上がり、洗われた空気に、木々の緑が映える。しかし、往来に人影はなく、川
岸には客のいない一艘の渡し舟がポツンと止まっている。一音もない、静寂の情景である。

「仰山臨水樓」が、枚方宿の民家(奥田家)を示していることは、奥田家旧蔵の直入の別作品「十六羅漢図」の画賛(参考図②・解説②)、「寓於仰山臨水樓為奥田賢次郎囑写(仰山臨水樓に寓し、奥田賢次郎の囑のため写す)」を見ても明らかである。ならば、図中の渡し舟は、「枚方の渡し」と呼ばれていた、三矢村(枚方)と対岸の大塚村(高槻)を結ぶ淀川の渡し舟をイメージしたものであろうか。山を仰ぎ、水に臨む樓閣。丘陵と淀川に挟まれた枚方の町の情景を、詩情豊かに表現した画題といえよう。

解説① 「仰山臨水樓囑目」

雨後倚水樓綠陰
過麦秋日長閑野
渡無復客呼船 青漢作表

明治七年六月十八日訪
奥田種次郎写仰山臨
水樓囑目併題博
主人一祭直入山樵田癡

雨の後、水際の樓閣に身を寄せる。
季節は綠陰、麦秋を過ぎた頃。
日は長く、野渡は静かである。
また船を呼ぶ客もない。

明治七年六月一八日
奥田種次郎を訪れ、仰山臨水樓
囑目併題を写す。主人一祭を博す。
直入山樵田癡

※ 「博主人一祭(主人一祭を博す)

主人の笑い草にしてください。書画
を披露するときの謙遜の常套句

※ 「直入山樵田癡」

「田」は田能村の田、「癡(痴)」は直
入の名、「直入山樵」は直入の号

※ 「野渡(やと)」田舎の渡し場

解説② 「十六羅漢図」

古人曰枯木寒巖三冬無一點暖氣、予未識果然乎、否
尊者以神通妙用功力明弁之、則當得教三千
界中人悉皆生於極樂淨土、若其不得、然則唯宜
質諸觀世音菩薩 明治四年次重光協合至日、寓
於仰山臨水樓為 奥田賢次郎囑写、終有余白
因併記乞政、釈尊七十七世法裔直入居士田痴拜

古の人は、「枯木寒巖に倚って三冬暖氣無し」と言いま
すが、私は未だ思い通りにはいきません。いや、尊者
は神通妙用の効力によって、正しい道理をわかまえる
ことができるのでしよう。すなわち、三千大世界の中
の人はことごとく皆、的確な教えを得ることができ
るならば、極樂淨土に生きることができるとも。もし、
教えを得ることができなければ、ただこれを觀世音菩
薩に質するのがよいでしょう。明治四年夏至(あるいは
冬至)の頃、「仰山臨水樓」に寓し、奥田賢次郎の依頼
を受けて描きました。最後に余白があるので、画賛を
併記しますので、ご批判ください。

釈尊七十七世の法を継ぐ者 直入居士田痴 拜

※ 「枯木寒巖に倚って三冬(一點)暖氣無し」

悟りを開き、世俗の欲に心が動かないこと
の例え。禅の公案『婆子燒庵』の一文。

※ 「三千界」

※ 「明弁之」

すべての世界(仏国土)を示す仏教用語。
道理をわかまえることができるというこ
と。『中庸』の一文。

※ 「至日」

夏至(あるいは冬至)のこと

展示によせて

鳥羽伏見戦争の瓦版

かわらばん

「瓦版」とは、政変・天変地異などの事件を報じた一紙物の摺り物で、新聞の先駆けとなったものです。この瓦版は、慶応4年(1868)1月に勃発した鳥羽伏見の戦いの戦況を伝えています。歴史上の合戦に仮託してあり、面白いものです。



時代の設定は、関ヶ原の戦いが起きた「慶長四年(1599)」となっておりますが、登場人物は、山崎の戦いに擬してあります。山崎の戦いは、天正10年(1582)6月、本能寺の変直後に、毛利氏と手を組んだ羽柴秀吉が天王山てんのうざんにおいて明智光秀を倒した戦いです。光秀は旧幕府軍の徳川慶喜を、秀吉は新政府軍総裁の有栖川宮を擬したものであり、秀吉の援軍に毛利氏ほか、実際の山崎の戦いには参戦していない島津氏、山内氏も登場しています。これら言うまでもなく、新政府軍の長州・薩摩・土佐軍を擬したものです。しかし、図中の人物は甲冑ではなく、洋式の軍服に身を包み、薩長軍の大砲が火を吹いています。はためいている旗は、官軍の印旗、いわゆる錦にしきの御旗みはたとみえます。本文中には、戦いの口火が切られた伏見鳥羽において、早々に劣勢となった光秀軍(旧幕府軍)が、淀、橋本、楠葉、枚方と、町を焼きながら大坂方面に落ちのびていく様子が克明に記されています。

鳥羽伏見の戦いの時代や人物を、関ヶ原や山崎の戦いのそれに仮託している理由は、権力に対する自主規制ともとれますが、むしろ、江戸時代の「見立て」の伝統を受け継いだものといえます。幕末の民衆にとって、山崎の戦いは歌舞伎などの芝居でおなじみの故事となっており、これに見立てて報じたほうが、身近でわかりやすいというわけです。瓦版は、新時代の黎明をもたらした政変すら、風刺めいた世間話のネタに変えてしまおうとする、エネルギーな庶民感覚のなかで普及したメディアといえるでしょう。

お知らせ

『幕末展—志士たちが駆け抜けた枚方』のご案内

市立枚方宿鍵屋資料館では2010年3月10日(水)から4月5日(月)まで「幕末展—志士たちが駆け抜けた枚方」を開催いたします。上に紹介した瓦版、文明開化期の自転車、長州討伐の際の助郷文書の展示のほか、幕末に街道・淀川を通った志士たちをパネルで紹介します。会期中、関連講座が2回あります(当館HP <http://kagiya.kanko.hirakata.osaka.jp/>をご覧ください)。